

複合的暴力に対する自己教育の思想と実践に関する研究 (VI) —エロスとタナトスの複合の心理歴史的研究 (3)—

やま だ まさ ゆき
山 田 正 行

人間科学講座

(平成27年9月2日 受付)

東洋と西洋を通底する性的ハビトゥスの強靱さを、東洋における日本の売女と中国の婬子の音韻的な関連性、中国の売買婚の童養媳、新婦仔、東洋の中近東（中や近は西洋の視点から）の古代における神聖娼婦、西洋近代の『共産党宣言』の「女性共有」、中国共産党と人民解放軍の新疆「辺境守備開拓団女性兵士」、日本共産党の「ハウスキーパー」に即して具体的に詳しく論じ、それを乗り越える生と性が小林多喜二の『党生活者』に描かれていることを明らかにした。

キーワード: 「慰安婦」、ヘーゲルの「詩作・吟詠」、文学のリアリティ、自己分析

I 問題意識 (problematique)

これまで複合的暴力の現象形態たる性と戦争が結合した「慰安婦」の考察を深めるべく、日本列島、朝鮮半島、中国大陆における性のハビトゥス（複合的慣習・習性）について考察してきた。それは根深く、なおも考察を続けなければならない。そして「慰安婦」という現象形態に留まらず、東洋的専制、家父長制、男尊女卑が複合した支配と性差別のハビトゥスの根深い強靱性に迫り、根源的で本質的な問題を考究しなければ、「慰安婦」が政治外交に悪用されるばかりか、その現象形態を変えた再発も防げない。

前回では日本への「恨」は千年を経ても変わらないという「千年恨」を取りあげたが、さらに、韓国外務省高官は、2015年4月3日、「加害者というのは、謝罪を100回しても当然ではないか。何回わびようが関係ない」と述べた¹⁾。対話による共通認識を拒むばかりか、高圧的な態度である。なお、4月3日は済州島事件の日であり、これをカモフラージュするためという解釈も可能だが、それもまた歴史的政治的な悪用である。

史実の考究ではなく、政治的な意図や思惑から戦術的に取りあげるために、日本の加害が過度に強調される。これを前面に押し出すことで、自国の差別、支配、性的搾取を後景に退け、隠蔽できるからである。しかし、これにより多角的な考察（家父長的な性差別という自国の反省も含む）が妨げられ、問題の本質に迫れず、従って克服できず、現在でも再生産されるのである（今回は「“性被害”訴えながら“性産業”担う『中国』『韓国』の現実」等を指摘）。

それでは、このような問題意識を以て、前回の考察をさらに進める。

II 東アジアに通底する性的ハビトゥス

1. 日本列島—江戸時代の「売女」—『世事見聞録』より—

本研究では明治維新以後の「からゆきさん」について論じてきたが、それ以前の江戸時代について言えば、「売女」という呼称が使われていた。

文化十三丙子（1816）年の『世事見聞録』の「序」では「誠に昇平二百有余年に及び、世々人心怠慢し、精根衰え、信義薄くなり、もつぱら驕奢淫靡に落ち入りて、かくのごとくなりしものなり」と述べられている²⁾。

これは同時代への問題意識であり、それに基づき様々な「世事」が記録され、その中で「売女」が取りあげられている。

そして「売女は悪（にく）むべきものにあらず。ただ悪むべきものはほかの亡八と唱ふる売女業体のものなり。天道に背き、人道に背きたる業体にて、およそ人間にあらず」と指摘されているとおり³⁾、加害者は「亡八」など売春業者であり、売女＝娼婦は被害者であるという認識が明確である。このような被害女性は「みな親の艱難によって出るなり。国々の内にも越中・越後・出羽辺より多く出るなり。わづか三両か五両の金子に詰まりて売るといふ」ように、貧困と人身売買により売女にさせられたのである⁴⁾。

次に売春の実状は「回しと号して、五人にても十人にても、客のあり次第に回して相対さするなり」と過酷であり、年いたらぬ者にも、無理強いし、病気でも強制すると記されている⁵⁾。当然、抵抗する者が出るが、そのような「女を責め遣ふ事」は「老婆」、「妻妾」、「遣り手」、「回し女」など「年丈けて意地の悪き女」を使う⁶⁾。所謂「やり手婆」であり、それは売女の中から選ばれ、年老いて客がつかなくなった女である。抜擢するのは極悪非道な亡八であり、同様に残酷であったと言える。その非道い処遇に耐えかねて逃亡しても、捕まえられれば、残酷なりんちを受ける⁷⁾。これはやり手婆の仕置きではなく、亡八自身が行う。また「公辺」に訴えても、「主従の沙汰」だと不問の付されて、連れ戻され、やはり暴行される。具体的には「竹篋（たけべら）にて絶え入るまでに」打ち叩いたり、「つりつり」という「丸裸」にして口に「轡のごとく手ぬぐい食（は）ませ、支体を四つ手に縛り上げ、梁へ釣り揚げ打つ」という残酷なりんちを受ける⁸⁾。

さらに、反抗そのものを考えられないように、「幼年」の少女を人身売買や誘拐で集め、「禿（かむろ）」として厳しく仕付け、世間一般の生活など分からぬようにして、ただ売笑の生き方しか考えられず、頼れる者は亡八しかいないと思わせるようにする⁹⁾。

ところが、庶民は「神隠しに逢ひし」などと喜ぶ者もいる¹⁰⁾。それは、知らぬ間の誘拐だけでなく、人買いに売った場合でも、人知れず行い、人が心配や不審を感じても神隠しを悪用したということも考えられる。

このような状況について、『世事見聞録』は「善道は廃り悪道は起り安きものなり。国家の道、油断ならざるものなり」と警鐘を鳴らしていた¹¹⁾。まさに貴重な記録であるとともに、現代でも読むべき意義を有している。

2. 日本列島と中国大陆—売女（バイタ）と婊子（ビャオヅ）の音韻的類似性

日本列島において、遊女、女郎、娼婦、売春婦、それに類する不品行な女性（あばずれ）を表す卑俗な表現に「売女（バイタ）」がある。「女」を「タ」と読ませるのは、当て字とされている（『広辞苑』等）。しかし、当て字だとしても、そこには理由があると思われる。ここで、ヘーゲルが『法の哲学』で述べた「理性的であるものこそ現実的であり、現実的であるものこそ理性的である」¹²⁾を応用し、欧米の言語では理性は理由の意味も内包していること（例えばreason）を踏まえ、このように「女」を「タ」と読ませるようになった理由について理性的、論理的に考えてみる。

そこで、中国語に視点を転じると、やはり売春婦などを指す卑俗な言葉に「婊子（biaozi, ビャオヅ）」がある。『辞源』¹³⁾では「娼妓」と説明されているが、中国の複数の友人・知人は卑俗な表現で、女性を侮蔑する時にも使われると説明した。娼妓というよりも、売笑やあばずれに近い。

これを踏まえて、「ビャオヅ」と「バイタ」の音韻的な類似性に注目すると、セクシュアルで卑俗な世界の交通、交流、交接について考えることが可能である。少なくとも一考に値する。中国語の婊子は漢字と音韻が対応しているが、日本語の売女はそうでないことから、「ビャオヅ」が日本では「バイタ」に訛り、また意味を表す「売女」が当てられたと推論できる。

なお、福建・台湾では「娼妹」という言葉がある¹⁴⁾。『問俗録—福建・台湾の民俗と社会—』では、やはり「娼妓」と説明されているが、「貧乏な村や小さな町ですら」、それが「流行」すると記されており、やはり卑俗な世界に関わっていると言える。

そして、このことは性的ハビトゥスのアジア的な広がりを示している。それは言葉や文化の基層をなす慾動や生体の根底的な次元における共通性であり、この歴史を貫いて存続する共通基盤の上で「慰安婦」が集められ、各地に動員され、或いは移動したのである。確かに日本軍の力が主導的であったが、また軍も社会的な組織である以上は、この共通基盤に立っている。この下からの影響力（ハビトゥス）と軍の上からの暴力的な組織力が合成するところにおいて「慰安婦」を総合的に考えなければならない。

3. 中国大陸と台湾—「苗媳」,「童養媳」—

『問俗録—福建・台湾の民俗と社会—』では「苗媳」や「童養媳 (トンヤンシー)」についても述べられている¹⁵⁾。当時、結納金など婚礼に関連する費用が高すぎて結婚できない者が増え、また女子は育て難いために「溺女 (間引き)」が行われて、さらに結婚が困難になり、「妻子を持たない匪民 (不法分子)」が略奪・乱闘を行い、騒ぎに喜んで加わる」などの多くの問題が生じ、このため「苗媳 (童養媳)」が制度化された。それは「貧しい者が女の子を養い、七、八年たてば掃除などができるようになり、さらに七、八年を経れば嫁になり、母になることができ」、これにより婚姻の困難をなくせるからであると『問俗録』では説明されている。

しかし、これは売買婚であり、男性支配の性差別に加えて商品として購入して所有するという枠組みにより、支配・被支配の関係性はより強まる。人情や情愛に篤い者を買われれば、『問俗録』で説かれたように嫁や母になれるだろうが、そうでない者では、家業や家事で奴隷のように使役され、また欲情を発散させる道具にされる。

20世紀の中国大陸でも「童養媳」は存在していた。中国革命に参加したウィリアム・ヒントンは、日本の撤退後、1945年末、かつて「童養媳」として「幼女のころに嫁に売られ」たが、その「家からも追いだされ、乞食」となった女性に言及している¹⁶⁾。彼女は纏足もしていた。

なお、ヒントンの主眼は、童養媳や纏足ではなく、中国革命の実態に向けられており、彼女は家から追いだされてから、別の村に二十年も住んでいたが、中国共産党の土地改革で「地主が問責され積年の負債をとりかえせそうだと聞いて急いで村にもど」るものの、村の「幹部」は「よそ者に『果実』をわけたくなかったので」、「敵意」を以て対応したという実状が述べられている。

そして、纏足はなくなったが、童養媳は中国大陸においては「新婦仔」など様々な表現で現在でも続いている。

4. 現代に存続・潜在する性的ハビトゥスの強靱さ

売女、婊子、苗媳、童養媳、新婦仔には直接的な関連は見出せず、それぞれが独自に現象しているが、その現象が社会の中では合流し、混在している。その混在の次元は、セクシュアルであり、また非合法 (ブラック)、半合法・脱法 (グレー) でもあるため、二重に秘されて伏在、潜在して、日常の市民生活では不可視の領域で広大な潮流となっていると考えられる。巨大と見なす根拠は売買春の現象形態が極めて多く、しかもそれは氷山の一角と見なせるからである。この現実象は象牙の塔で「研究」するような者には分からない。そして、この不可視で巨大な伏流に巻き込まれて少女が身売りに出され、売春婦になる／させられるというライフコースを辿る。

その中で、先述のように童養媳から妻になれるのは幸運な方だが、たとえ妻でも、因循で重苦しい家父長制的支配の下で婢 (めやつこ) 同然であった。それは現在の新婦仔でも指摘されている。

しかも、非合法的な人身売買は多様な形態で根深く広範に存続してきた。不可視ではないが、文字化し難い低層社会のリアリティを文学的に結晶化した『中国低層訪談録—インタビュー どん底の世界—』¹⁷⁾ IIの「人買い」では、縁結びの仲介から人買いになり、罪悪感など全くなく居直った男が記述されている。それは学問的な実証ではないが、インターネット空間のグレーからブラックまでの無数の情報と照らし合わせれば、それらを文学的に凝縮しており、その意味で十分なりアリティがあり、ヘーゲルの「詩作・吟詠 (Das Dichten) は自然の模倣ではない。詩 (Poesie) は卑俗な表現より、さらに高い意味において真である」の如く¹⁸⁾、学問的に注目すべき価値を有している。

事実、現在でも以下のような報道がある¹⁹⁾。

「2015年2月27日の新華社電によると、中国最高人民法院は、全国の裁判所で2010～14年の5年間に、女性・児童を誘拐して売り飛ばした罪に問われ結審した事件が7719件に上り、計1万2963人の被告に判決が下されたと明らかにした。このうち7336人に懲役5年から死刑の重い判決が出たとされ、当局は厳罰で臨む姿勢を強調している。」

また前掲『中国低層訪談録』IIでは新疆の「辺境守備開拓団女性兵士」が取りあげられ、そこでは、戦後、しかも中華人民共和国成立後、少女たちが中国共産党と人民解放軍に欺されて結婚させられた「国家レベルの壮大な結婚詐欺」²⁰⁾が記述されており、これは「慰安婦」に通じる問題である。

まして七十年以上前の戦時下では、推して知るべしである。このような東洋の専制の家父長的支配抑圧の社会が「慰安婦」の供給源となっていたと言える。

そして、共産党と性的ハビトゥスという問題は、共産党宣言から日本共産党の「ハウスキーパー」に至る歴史にも認められ、この点は後述する。何故なら、共産党宣言は西洋で発表されたのであり、この考察は東洋の専制の範囲を超えるため、まずグローバルな視角から問題を検討しておかねばならないからである。

Ⅲ グローバルに伏在・通底する性的ハビトゥス

1. 古代の中近東—神聖娼婦—

娼婦は最古の職業と言われ、その根拠に神聖娼婦（神殿娼婦）が挙げられている。それは、神殿を訪れる男の金品を受けて性交を提供する女性で、金品は神殿に献げられるという。そこには神殿への寄進を動機づける機能があり、そのために女性を使う点で娼婦と呼べる。

これについて、西洋のギリシャ人の歴史家、ヘロドトスは、西洋に近い東洋（広義のアジアの中近東）のバビロン人の「風習の中で最も破廉恥なもの」として記述している²¹⁾。そして彼は具体的にアプロディテの神殿における風習を記述し、さらに、アッシリア人はアプロディテをミュリッタ（バル）と呼ぶが、やはり同じようにしており、キュプロスでも「幾箇所かのこれと似た風習がある」と述べている。

ただし、この娼婦はブラックやグレーではなく、神聖であった。神聖娼婦は「聖婚」²²⁾、「神婚」、「聖体婚姻」などと呼ばれる儀式において、宗教的権威者・主宰者と性交した。確かに、主宰者の従属的な位置に置かれていたが、彼女なしに儀式は実践できず、それを担う主体の一人であったと言える。それは神話で伝承された男女二神の交合・媾合を現実の世界で象徴的に再現する祭儀であり、世界を創世した天の父神と豊穡をもたらす地の母神の、男神と女神の婚姻・性交に霊的に合体することで、豊かな狩猟、採取、収穫（生産）と子孫繁栄（再生産）を実感しつつ祈願する実践であった。祭儀の参加者は、神殿の主宰者と神殿娼婦の交合に導かれ、相互の交合を神との交合を連想・幻想して実践し、神的な活力を与えられ、自分自身、土地、部族社会の豊穡の確信を得た。

大凡それは春に行われたと伝えられている。北半球では冬は生存が厳しく死を連想させ、春は死からの蘇生、復活を思わせたからであり、聖婚は死と生・性（再生）のサイクルの節目となる儀式であった。

これは、進化論的に言えば動物的な発情期の慣性的な残存形態と捉えられる。また、現実の一年の生と性の周期（ライフサイクル）にも適合していた。子供が冬に生まれれば、母乳で育てられ、食糧が必要でないため、厳しい冬を乗り切れるからである。離乳の段階になるのは、春を過ぎ、生命活動が活発になり、食糧を容易に得られる時期である。

2. 四人の妻が公認されるイスラム圏で今もなお続く性的奴隷の売買

中近東では、その後、イスラム教が広がった。そして、イスラム教では妻は四人まで公認されている。

これと先述の神聖娼婦の間にはかなりの隔たりがあるが、それでも無視することはできない。ヘロドトスの「最も破廉恥なもの」を踏まえ、注意を払わねばならない。四人も公認できるならば、離縁やグレー・ゾーンを悪用することで、恣に女性を性的に搾取できるからである。

イスラム教は厳格な戒律で知られるが、その厳格さと四人の妻は裏腹であると言える。イソップ寓話「ヘルメスの車とアラビア人たち」(112篇)では「アラビア人たちはどの民族よりも嘘つきで、かたまりである」²³⁾と述べられていることは、見過ごせない。専制支配は暴力的で残酷であり、その下では「嘘つき」でなければ生きていけない。本心を表せば生命が危うくなる。そして嘘は道義や人道に反する点で暴力に通じる。だからこそ暴政と暴民は相関している。魯迅は「暴君治下の臣民は大てい暴君よりもっと暴である。暴君の暴政は、大てい暴君の治下の臣民の慾望を満足させることができない」と別括した²⁴⁾。

21世紀の現在において「イスラム国 (Islamic State)」が性的奴隷の、若いほど高額な売買価格表を作っていることは²⁵⁾、このような性的かつ暴力的なハビトゥスの所産である。売り手には買い手が必要であり、「国」が性的奴隷を売買するという社会が今もなお存在しているのである。そして、買い手は中近東の富裕層という。

即ち、紛争下の性暴力を担当する国連事務総長特別代表のザイナブ・バングーラは、過激派組織「イスラム

国」は捕らえた女性と子供を奴隷として売り渡すために価格表を配布しており、その残虐ぶりにはかつてないほど深刻になっていると指摘した。彼は4月のイラク出張で「イスラム国」のパンフレットの写しを入手し、その中に価格表が含まれており、幼い子供たちが最も高値であったという。「イスラム国」兵士が1～9歳の少年や少女に払う金額は1人当たり約165ドル相当であり（記事配信時で約2万円、価格表ではイラク通貨ディナールを使用）、未成年の少女は124ドル、20歳を超える女性の値段はこれより安い。そして兵士は家族に身代金を要求したり、転売するという。

この価格表は、その約八カ月前に明らかになっていたが信憑性に疑義が呈されていた。しかし、バンゲーラは、確かに「イスラム国」が配布したものであり、実際の取引を反映していることを確認したと述べた。彼はまた「少女たちはバレル単位で売られるガソリンのように売買されている。1人の少女が5人か6人の男たちに売買される可能性もある。これらの兵士たちは少女らの家族に数千ドルの身代金を要求して売り戻すこともある」とも語った。

そして、中近東の富裕層が買い手であることから、問題は「イスラム国」に限定されない。「イスラム国」という名称は「イスラム」の誤解をもたらすからISISなどを使うべきだという議論も安易に受けとるべきではない。四人の妻を公認するイスラム教の教義が問われているのである。「国 (state)」を標榜する組織の犯罪であることから、「国家レベルの壮大な」拉致と人身売買と言える巨大な犯罪に対して、イスラム教の信仰を守るためにも、信徒は態度を明確にしなければならない。

3. 東アジアの性的ハビトゥスのグローバリゼーション

(1) 先行形態—日本（東洋）と米国（西洋）の接点における「唐人お吉」—

西洋に視点を移すと、欧米の資本主義諸国は帝国主義へと進み、米国はマシュー・ペリー提督の率いる軍艦（黒船）を鎖国の日本に派遣した。威嚇と交渉の後にアメリカ海軍の軍人や軍属は下田に上陸した。彼らに対して、幕府は女中兼愛妾を用意し、その中で最も名が知られているのは「唐人お吉」こと「斎藤きち」であり、他に「ふく」、「さよ」、「まつ」、「きよ」の四人の女性が領事館に仕えたと伝えられている。グレー・ゾーンのことで、資料は乏しいが、信頼性はある。

斎藤きちは下田で随一の人気芸者であったが、病床の世話という名目でタウンゼント・ハリス（外交官で初代総領事）の妾（現地妻）になった。その後、芸者に戻るが、西洋人に身を寄せたことを汚らわしいと見なす蔑視・偏見を受け、酒に溺れ、最後は入水自殺を遂げたという。このようなライフヒストリーは、ペリー率いる軍艦は来航だったのか、或いは来襲かについて考える上で決して軽視できない。

(2) 東洋と西洋の交流・合流におけるマルクス主義的共産主義

その後、明治維新を経て、来航／来襲とは逆に日本から海外に向かう「からゆきさん」が現れる。その一方で、海外から西洋のマルクス・レーニン主義が日本に入る中で「女性共有」（「共産党宣言」等）の日本的形態たる「ハウスキーパー」が現象する。資本主義的搾取、帝国主義的支配をラディカルに批判するマルクス・レーニン主義でも、女性の性的な支配・搾取が実践されていた。海外から日本へ、日本から海外へと方向が異なり、また資本主義、帝国主義、共産主義とイデオロギーが違うが、性の差別や搾取では共通している。まことに問題の奥深さ、深刻さが分かる。

この問題意識を以て、次にマルクス主義的共産主義における性の問題についてさらに詳しく考察する。ここで共産主義にマルクス主義的と限定するのは、共産主義の歴史は旧く、原始共産制から文明が創生した段階にまで遡れるのであり、そのような共産主義の思想史の中で弁証法的唯物論や史的唯物論で特徴づけられるのがマルクス主義であるためである。それは、十九世紀に現れ、二十世紀の思潮やイデオロギーをダイナミックに主導し、一九八九年の天安門事件やベルリンの壁の崩壊を転換点として衰微した。

(3) 国境を越えた人身売買—中国のカンボジア人「花嫁」—

マルクス主義的共産主義者は、その思想・イデオロギーを実践するために共産党を結成し、暴力革命で政権を奪取すると一党独裁体制を確立する。

1949年から共産党一党独裁体制となった中華人民共和国では、プロレタリア文化大革命が終息した後、経済

の領域で市場経済化による高度経済成長を進めた。これにより一党独裁資本主義社会が現れた。そして、やはり共産党一党独裁のベトナムから「花嫁」が売られるようになり、それが社会問題になった。このため、中国もベトナムも対策を講じなければならず、「花嫁」として結婚を名目にした人身売買の市場はベトナムからカンボジアに移行した。

これに対しても対策がなされ、2013年、事実上の性的奴隷にされたカンボジア人女性で、中国からカンボジアに帰れた者は21人、2014年には国際移民NGOやキリスト教系NGOの支援もあり58人の女性が帰国できたという²⁶⁾。しかし、それもやはり氷山の一角で、無数の女性が人身売買の犠牲になっていると推論できる。

具体的にカンボジアから中国の農村部に「結婚」のために売られてきたカンボジア人妻の悪質で重大で悲惨な事例が報道されている²⁷⁾。29歳のカイは、2013年6月に人身売買で中国に連れてこられた。それまで彼女は貧しい農村で父親と7人の兄弟姉妹と暮らし、テレビで見る中国のメロドラマが唯一の楽しみだったという。現地の仲介女性から勧誘された時に夢見たのは、北京や上海のような大都市を舞台にしたドラマの主人公（大都市の生活、高給の仕事、裕福な夫等々）だった。仲介女性はさらに「中国人はお金持ちだから。嫌だったらすぐに帰ればいい」と強く勧めた。

ところが、彼女は、広東省広州市の空港に着くと、待っていた4人の中国人男性と1人のカンボジア人女性に「紹介する中国人男性と結婚しろ。そうしなければ路上に放り出す。カンボジアの家族にも危害を加える」と脅された。そして車に長時間も乗せられ、カンボジアの実家よりも辺鄙な村に強制的に連行され、言葉が全く通じなく、年齢さえ不明な中国人男性と結婚させられ、朝から晩まで奴隷同然に使役され、夜は性的関係を強要され、それに従わないと即座に虐待された。

この性的奴隷の生活の中でカイは様々な方法を用いて仲介者を説き伏せて携帯電話を手に入れ、カンボジアのラジオ局に苦境を訴えた。ラジオ局は在中国カンボジア大使館に通報し、彼女は無事に帰国できた。これは問題が明らかになり、しかも不十分ながら解決された、数少ない幸運な事例である。

このように結婚が極めて困難な貧困地域の男性に売られ、強制的に妻にさせられることは、結婚詐欺のレベルを超えて、人身売買による性的奴隷の問題である。実際、当該男性の父親や兄弟、叔父などとも性的関係を持つよう迫られた女性や、性的「産業」で「労働」を強制される女性も少なくないという（グレー・ゾーンの情報だが軽視すべきではない）。

（４） グローバルな中韓女性の人身売買、性的奴隷と中韓仲介業者

2015年4月2日、カナダ治安当局は、中国や韓国の女性500人以上を誘拐し、カナダの犯罪組織に売り飛ばし、売春を強要していたという容疑で、20代から30代の中韓の仲介業者6人を逮捕した²⁸⁾。中韓の被害女性はモントリオール、オタワ、ハリファスク、トロントなどで売春を強制されていた。6人は被害女性を誘拐した後、偽の身分証明証、パスポート、ビザでカナダに入国させ、各地に強制連行した。被害女性は一カ所に数週間ほど劣悪な環境で監禁されて売春を強制され、次々に各地を転々とさせられた。まさに性的奴隷である。

また、8月20日、韓国の「東亜日報」は「国の品格」という特集記事で、男性の買春の海外旅行や女性の海外の売春を取り上げ、そのような韓国人は「醜い（アグリー）コリアン」と呼ばれていると批判し、「性を商品化し、海外での買春を娯楽程度に考えるような歪んだ性文化が変わらない限り、国の品格が上がることはない」と提起した²⁹⁾。これに対して、インターネット空間では「こんな国が慰安婦で日本に文句を言うとは」、「日本人だって買春旅行に来てる」等と発信された。韓国では、このような記事や議論が可能だが、一党独裁体制で厳重な言論統制下にある中国では極めて難しい。ネット空間で出されても、削除されることが多い（特に「慰安婦」等の戦争の歴史に関して）。

以上は、韓国女性が被害の立場であったが、次は被害とは言い難い事例である。2015年8月23日、韓国ソウル警察庁国際犯罪捜査隊は中国マカオ司法当局と協力し、「売春斡旋等行為の処罰に関する法律」違反の容疑で売春業者4人を拘束し、売春婦80人を書類送検したと発表した³⁰⁾。それによると、容疑者は共謀者と10人で、2014年2月から15年5月まで、韓国において売春婦66人を募集し、マカオに連れて行き、一流ホテルなどで売春をさせたという。その売り上げは、1回当たり最大210万ウォン（約21万5000円）で、計7億5000万ウォン（約7700万円）に上り、わずか4カ月で3億ウォン（約3100万円）を稼いだ売春婦もいた。売春婦の中には、日本女性を好む中国人の客に、和服を着て日本語を話すなどで日本人を装った者もいた。これに関してイン

ターネットで様々な意見が出されたが、その中には「日本が従軍慰安婦を認めない訳が分かる」、「この売春婦たちは、30年後には日本が強制的に和服を着せて、売春させた」と抗議しまくるのだらうな」等があった。

マカオも1999年に中国に返還され、共産党政権の統治下にある。たとえ、市場経済化が進み実質的に資本主義社会となっているとしても、政治的イデオロギー的には共産主義であり、それと性の問題は軽視できない。この点について、次に『共産党宣言』の「女性共有 (community of women)」を改めて取りあげ、前回の考察を発展させる。

IV マルクス主義的共産主義における「女性共有」、「共産共妻」—再論—

『共産党宣言』は共産主義の中でもマルクス主義的なその宣言であり、「女性共有」はこの中で出されている。そして、これまでの考察からマルクス主義において、性的な差別や搾取・収奪の歴史的限界がなおも続いているどころか、むしろ広がっているとさえ思われる。日本共産党の「ハウスキーパー」は『共産党宣言』の「女性共有」と切り離して考えることはできない。『共産党宣言』はマルクス主義を代表する文献であり、日本共産党はそれから逃れることはできない。

この問題意識を以て『共産党宣言』について改めて見ると、その二「プロレタリアと共産主義者」で、マルクスやエンゲルスは、支配階級の「ブルジョワ的家族」、「ブルジョワ的婚姻」たる一夫一婦制は偽善で、夫は妻を生産の用具に位置づけ、妾、娼婦、姦通に走っており、「女性共有」は「共産主義者」が言う以前に常に既に存在していたと論じた。その文脈から、これまで「女性共有」の問題があったから、それを正視して、解決に取り組むというのではなく、前々から偽善で装っていた「女性共有」を公然化しようと読むことができる。

これを踏まえて、前回のIV「西欧と日本—『共産党宣言』の「婦人共有」と日本共産党の「ハウスキーパー」において引用した箇所について、改めて検討する。確かに、英文ではcommon in wivesとcommunity of womenと表現が異なり、後者の「共産主義者」の「女性共有」に関する部分は共同性を含意し、また辛辣なブラック・ユーモアも読み取れると解釈できるが、明確に「女性共有」を否定していないのである。この点も前回で指摘したが、ここでは、それだけでは不十分で、むしろ居直りさえ内包されていると指摘せざるを得ない。

確かにこれは明示されていないが、文脈、行間、紙背から読む者によっては読み取れる。読解力の問題であり、また不可視の次元まで洞察できる認識力が問われる。そして、この居直りは、ブルジョワ階級の支配は暴力的であるから暴力革命は認められ、またそうすべきであるという主張でも見出せ、マルクス主義の特質と言える。

さらに、居直りは反逆的性向の反応を引き出す効力を有しており、その効果はアウトサイダー（グレー）だけでなく、アウトロー（ブラック）の反逆にも及ぶと言える。効力や効果は一般的でありグレーやブラックなど区別できない。これもまた明示されていないが、その可能性は否定できない。

ただし、マルクスは『経哲草稿』で「女性共有の思想」は「粗野で無考な共産主義」と述べており、それも取りあげておかねばならない（引用は前回した）。これについて、1970年代、学生運動で、マルクス主義を擁護するための言説として語られていたのを幾度か耳にし、私もそのように理解した。同じ時期に、エンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』（訳は多数）を国民文庫版で読み、その第二章で家族が論じられる中で政治的制度的経済的な男女同権が提起されるが、現実には夫がブルジョワで、妻はプロレタリアであるという類比を学んだ。これを踏まえ、「女性共有」はあくまでも「粗野」な段階の共産主義で、資本主義を乗り越えた共産主義ではないと考えた。そして、マルクス主義は唯物弁証法や唯物史観を以て従来の思想を全面的にラディカル（激しく根底的徹底的）に総批判し、旧弊で偽善的な道徳的イデオロギーを打倒し、真に平等な男女関係や自由な恋愛・結婚を提起したのであると思おうとした。私もマルクス主義を擁護した一人であった。

また、地域（葛飾の東四つ木など）の共産党員や民青同盟員との対話において、時に、自然、歴史、社会、人間の体系的な認識の上に、人類を解放する革命のロマンと自由な恋愛・結婚の浪漫が合成され、相乗効果で各々高まるというビジョンが出るがあった。それに私も憧れたが、しかし、後述するように、憧れだけに止まった。

他方、マルクス主義を熱心に学び始めた頃、東大駒場寮での対話で、マルクスが女中と密通して私生児を生

ませたことを知った。そもそも、共産主義者が女中を使っていたことに驚いたが、密通と私生児まで知らされ、当惑したが、それを教えた者が真面目であったので、受け入れた。最初は信じられなかったが、その後、彼の言うとおりでであることを確認し、呆れ果て、マルクスは生活（ライフ）の実践では「粗野」なレベルの共産主義者であったと認識した。さらに、世間体どころか思想的にも政治的にも極めて重大な問題となるため、私生児は密かにエンゲルスに引き取られたことまで知り、これは個人だけでなく、組織や運動も「粗野」な共産主義のレベルであったと考えるに至った。

これは西洋に止まらない。前回も取りあげたが、東洋の中国共産党では、毛沢東や劉少奇は次々に妻を新しく替えた。公認されただけでも毛は四回、劉は六回であり、隠された不倫・密通は数知れない。毛沢東に限っても、少なくとも「生活秘書」の張玉鳳や孟錦雲、「情人」の陳惠敏（陳露文）の三名が知られている³¹⁾。従来から中国では共産主義を批判、揶揄する「共産共妻（共産主義は妻を共有）」という言説があり、私は中国共産党を非難するためだろうと思ったが、様々な史実や事実を知り、これは現実を表現していると判断した。

そして日本共産党では、野坂は、モスクワに妻の龍がいながら、延安で中国人の「延安妻（現地妻）」の辻瀧と同棲していた。また、宮本は大森との不倫だけでない。2010年3月19日午後、放送大学大阪学習センターの勉強会の終了後、参加者の一人との対話において季報『唯物論研究』第110号（2009年11月）掲載の私の書評「小林多喜二『党生活者』—『蟹工船』とともに」を渡すと、彼は「宮本は部下の女を何人も手をつけた」と語った。彼は七十歳代（当時）で、『産経新聞』や『正論』の読者だが、旧友に共産党員がおり、この旧友が困難な中で奮闘し、思想を堅持して死去したことについて、「何で!？」と憤懣を抱き、かつ問いかけ続けていた。彼の人間性を踏まえると、これは誹謗ではないと考える（彼と宮本には直接的な利害関係はない）。

このように、マルクス主義的共産主義の「女性共有」、「共産共妻」の深刻さを繰り返し再確認させられ、さらに、指導者の言行不一致、欺瞞、偽善も考えさせられた。確かに、政治の領域では、マルクスやエンゲルスが亡命を強いられても思想を曲げなかったことは言行一致と認められるが、しかし、性においては、そうではない。性的ハビトゥス（複合的習性）や慾動の強靱さを再認識させる。そして、これに根ざしたイデオロギーが現象した言説が「女性共有」や「共産共妻」であると捉える。支配抑圧をラディカルに批判し、平等な社会を目指すと言いつつ、実は差別しているという虚偽は、イデオロギーとしての特質だからである。

それでは、この点について、さらに「ハウスキーパー」に対する宮本や日本共産党中央委員会の欺瞞に即して考察を深め、その上で「最も実践的な末端」³²⁾で奮闘した小林多喜二の文学に即して生と性の根源に迫る。それは限界状況や実存の追究とも言える。これにより前回の考察をさらに発展させ、問題の追及だけに終わらせない。

V 日本共産党の「ハウスキーパー」と小林多喜二の『党生活者』

1. 限界状況における「ハウスキーパー」

「ハウスキーパー」は、戦前の治安維持法体制下で男性の共産党員と同棲していた女性の党員や協力者（シンパ）を指す。非合法で活動せざるを得なかった共産党員が、周囲に不審の念を起こさないように、一般的な平常で平穏な家族であるように見せるためであった。

当時、共産党員やシンパは、単に非合法のために投獄されるだけでなく、身体的かつ心理的に残酷な拷問や暴行も覚悟しなければならなかった。それは心身ともに深刻な傷を負わせ、甚だしくは廃人に至らしめ、或いは早すぎる死をもたらす残酷な暴力であり、直接間接の虐殺であった。常にその危険性に曝された男性党員と「ハウスキーパー」は、まさに限界状況を共にしていたのであり、その生（life, leben, vie等に相当し、生命、生存、生活、生涯、人生などを内包）は厳粛に考えなければならない。

これを踏まえた上で、活動する男性と、家（ハウス）で仕える女性という、前近代的家父長制的な性別役割分業について問わねばならない。活動する女性党員と男性「ハウスキーパー」という組み合わせは見出せないからである。

このような「ハウスキーパー」は、福永操によれば、一九二八年の「三・一五事件以後から存在し」、一九三〇年頃には「慣習化されたものとして喧伝されていた」という³³⁾。「慣習」とは言え、それは一般的な「慣習」ではなく、プロレタリア独裁を標榜する民主集中制の革命組織（しかも「執権」の言い換えで糊塗す

る以前)における「慣習」であり、その機能や効果は命令に等しい。

「ハウスキーパー」は困難な地下活動に加えて、秘すべき性 (sex, sexuality) に関わるため、二重に隠されてきたが、それでも、数少ないながら、文献でも取りあげられてきた³⁴⁾。さらに『深き夢みし—女たちの抵抗史—』では、大道俊、長谷川章子、城ゆきの三人の生、性、愛、闘いが具体的に記述されており、それは極めて貴重なオーラル・ヒストリーである。

大道は男性党員に「一目ぼれ」し、長谷川は「男と女の生活ではない。きどらず、ヒューマンな態度で、相手もそんな態度で接し、活動していたの」と述べるが、城が「ハウスキーパー」として男性党員と「同居せよ」と指示されたことについて、大道は「仕組まれたような気がする」と語っている³⁵⁾。大道の場合は同志愛と恋愛の合致、長谷川では共産主義的な禁欲的实践倫理だが、城においては不本意でも思想と党のために耐えるという三者三様で、これだけでも極めて複雑な問題であり、決して単純に面的に捉えられない。確かに、その基本には日本の革命を通して世界革命に貢献し、全人類を解放するという思想や理想が通底している。それでも、やはり外で闘う男を内で支える女という家父長的性差別が貫かれており、男尊女卑と滅私奉公が民主集中制に合流し、合成された歴史的制約は否定できない。

その上で、城の「仕組まれたよう」だという点に注意すると、誘導、さらには詐欺という問題になる。これ以上は検証しようがないが、その可能性は見逃すべきでない。

さらに、結婚による妻ではなく「ハウスキーパー」であるのは何故かという点も問わねばならない。同志の男女が結ばれることは、共産主義の立場でも祝福すべき慶事である。それなのに、どうして婚姻関係を結ばずに、同棲生活のままであったのかという問題である。この点について、次の二点に即して検討する。

まず、時代の状況について述べると、大正デモクラシー、大正成金 (バブル)、モボ・モガ (モダン・ボーイやモダン・ガール)、マルクス・ボーイ、マルクス・ガール等々をめぐる思潮や時流が複合して醸成された封建的性差別からの解放がフリー・セックスへと流れ込む社会風俗の影響を挙げることができる。その中で、1921 (大正10) 年10月20日に「白蓮事件」が起き、その影響は大きいと言える³⁶⁾。これは、大正天皇の生母の柳原愛子の姪で、大正天皇の従妹であり、また福岡の「炭鉱王」と称された伊藤伝右衛門の妻であり、さらに歌人として名を馳せた柳原白蓮 (伊藤燐子) が、滞在先の東京で、大アジア主義の立場で中国革命に賛同し、孫文を支援した宮崎滔天の息子で東大の法学士の宮崎龍介と駆け落ちした事件である。しかも、新聞紙上で妻の白蓮から夫の伝右衛門への絶縁状が公開され、それに対して夫から反論が掲載されるなど、センセーショナルなスキャンダルとして話題になった。

このような状況下で、二人は正式な婚姻関係を結べないため、同棲生活を始めた。その後、事件は宮中にまで関わり、白蓮は連れ戻され、幽閉されて出産した。確かに、事態が落ち着いた時期に白蓮と龍介は結婚したが、著名人の公然たる同棲が大々的に報道されたことの影響は決して小さくなかった。特に、新思潮に影響されたマルクス・ガールやマルクス・ボーイは、同棲が旧来の慣習、規範、倫理、道徳に反抗した点で、共感・共鳴した可能性は高かったと捉えられる。

次に、男性であれ、女性であり、いつ投獄され、さらには残酷に虐殺されるか分からないという限界状況を生きているならば、自分はまともに結婚することなどできないと自覚していたことは十分に考えられる。そのため、正式な婚姻関係どころか、内縁でもなく、一時的な家事手伝いをイメージさせる「ハウスキーパー」(家政婦の横文字で新思潮と協調的) という言葉が使われたと推論できる。

その中で、明示されていないが、仮に、革命に命を懸けて虐殺さえ覚悟した闘士に、せめて死が乙ずれる前に女性を知る機会を提供してあげたいという配慮があるとすれば、それは召集された兵士への恩情・温情という心性に類似しているのではないかと言うこともできる。

そして、この推論や疑問は、これまで論じてきた「女性共有」の問題に通底する。しかも、日本共産党は「ハウスキーパー」について指摘されても、次に論じるとおり、問題を糊塗し、責任を回避しており、これは推論や疑問の妥当性を補強する。

2. 宮本顕治や日本共産党中央委員会の釈明と日本政府の河野談話以前の「慰安婦」への対応の相同性

宮本は「日本共産党はハウスキーパー制度というものをかつて採用したことはなかった。個々の党員がそれぞれにふさわしい婦人党員と同居することは、その人たちの自由であって、党は干渉しなかった」と述べる³⁷⁾。

特高警察の執拗な追跡、残酷な拷問・虐殺を覚悟した地下活動という限界状況における生（ライフ）など毫も触れておらず、言わば官僚の責任回避の陳腐な作文と同列に位置づけられる。これを「文芸評論集」の名を冠した書物に再録したことは恥の上塗りであり、彼と編集者、編集者、出版社のレベルの低さや無恥を表している。だからこそ、宮本は妻の秘書（大森）と破廉恥な密通もできる。

ただし、所謂「スパイ査問」致死事件で痛烈に追及されながら、密通が問われないのは、家父長的男尊女卑のハビトゥスが根深いためのみならず、宮本にはスパイとしての役割があるため³⁸⁾、彼の追及は程々にして、追い落とすまでは進めないという当局の謀略のためと分析する。このようにして、宮本は日本共産党の指導者としての役割を演じ続けられ、その権威で「ハウスキーパー」の問題を「その人たちの自由」だとして、当人の責任に転嫁できたのである。

そして、前述した官僚の作文の如き説明には、当時の現実を知らない者に、党員の男性と女性が自由な恋愛で「同居」していたと思わせる効果がある。これにより、民主集中制の下で、文書には残さず、暗黙の圧力を以て最も秘すべき性行為を強い、或いは「仕組み」ながら、それが追求されると、当人の「自由」だと釈明し、党の責任を回避することができる。それは官府の役人の責任回避と同然であり、「慰安婦」問題に関する当初の政府＝体制と相同である（確認のために言えば、ハウスキーパーと「慰安婦」の相同ではなく、責任回避の相同）。

しかも、これは宮本に止まらず、日本共産党中央委員会も同様である。2004年に、井上が中央委員会に問い合わせると、前述の宮本の作文を繰り返し、党としての「正式見解が必要という性格の問題ではない」と回答した³⁹⁾。政府は河野談話やアジア女性基金（女性のためのアジア平和国民基金）で改めたが、政府を批判する日本共産党は相変わらず責任を回避し続けている。

3. 小林多喜二『党生活者』の意義

宮本や中央委員会の検討は、指導者や組織の問題を明確にするためであり、次に、それとは対照的な「最も実践的な末端」における小林多喜二の生（ライフ）と文学について考察する。そのためには論理的思考のみならず、パスカルのいう「繊細な精神（l'esprit de finesse）」⁴⁰⁾も求められる。これにより『深き夢みしー女たちの抵抗史一』において示された生や性の根源に迫ることができる。

いくつもの記録から、拷問や虐待では、苦痛のみならず性的な恥辱も加えられており、「ハウスキーパー」であることは、女性の実存を懸けた決断であった（男性では性器の損壊、去勢さえも）。そこにはマルクス主義が惹起した女性解放、平等な男女関係、自由な恋愛・結婚・性のビジョンを実現しようとするチャレンジ（挑戦であり試練でもある）もあったと言える。まさに、このような生と性には厳粛に正対しなければならない。そして、小林の『党生活者』は、それに相応しい文学作品となっている。

確かに、これは創作であり、さらに前編だけの未完だが、リアリズムが貫かれており、かつ実存に迫っている。創作とは言え、むしろ創作だからこそ、無数の無告の民の声なき声が優れた作家により凝縮されており、リアリティがある。

ところが、プロレタリア文学を代表し、思想に殉じた共産党員である小林の「党」を表題に打ち出した『党生活者』に対して、共産党は消極的である。それは、シンパで「ハウスキーパー」の「笠原」や同志の「伊藤」という二人の女性との関係性をめぐる心理的な機微や葛藤が描かれているためと言える。これはリアルな現実に迫るだけでなく、真摯で誠実な文体や描写によって読者を深く考えせしめており、この意義は極めて高いが、しかし、党の評価は異なるのである。評価できないと言える。

宮本百合子は『党生活者』の評価を明示せずに共産党を擁護しており⁴¹⁾、先述の官僚的な公式見解と同様である。夫（顕治）との関係性を考えると、彼女は内心を押し殺しており、そのため『党生活者』の文学的な意義の理解も不十分になったと分析する。それらは、彼女の文学的な限界のみならず、表現の自由の自主規制であり、民主集中制の悲劇的な所産と見なすことができる。

ただし、この限界においてもなお、彼女は内心の吐露に努めていた。前掲「記憶の風化と歴史認識に関する心理歴史的研究—抵抗と転向の転倒—」では、「風知草」を注意深く分析すると、宮本顕治への批判を読み取れることを論じた。これに加えて、ここでは、彼女は「二つの庭」で、宮本の「敗北の文学」と異なる芥川龍之介の評価を示唆していることを指摘しておく（この考察は別の機会に行う）。

次に、手塚英孝は『小林多喜二』⁴²⁾の目次で『一九二八年三月十五日』、『蟹工船』、『不在地主』、『工場細胞』の四つを挙げるが、『党生活者』は選んでいない。それでも、彼は「今までのプロレタリア小説の型から抜け出ようと、努力してみた作品です。今迄の私の一系列の作品から見ても、私はこの作品の成果を特に注目しています。単なる失敗をおそれずに書いたものです」と評価するが⁴³⁾、それ以上は論じていない。これも日本共産党員という立場による限界のためと言える。

むしろ、小林の生、そして死に関しては、志賀直哉の一九三三年二月二五日の日記や二四日付の小林の母に宛てた書簡、及び魯迅の追悼「同志小林の死を聞いて」の方が簡明、直截、的確である。さらに、小林と女性との関係性に関しては、澤地久枝「小林多喜二への愛」(『続昭和のおんな』文藝春秋、一九八三年)や三浦綾子『母』(角川書店、一九九二年)の方がより深い。そして、いずれも共産党=組織とは離れた立場によるものである。

これを踏まえれば、一党独裁体制確立後のソ連におけるゴリキーの生と死、及び毛沢東の魯迅に関する以下の発言は、仮に小林が虐殺されず、日本共産党が政権を奪取した後に『党生活者』を発展させた作品を発表した場合にも当てはまると推論できる。即ち、毛沢東は魯迅を偶像化して悪用したが、「一九五七年に上海で文化人グループに会見した際」、「もしも今日、魯迅がまだ生きていたら、どうなっていたでしょうか」と問われて、「私が思うに、牢屋に閉じこめられながらもなおも書こうとしているか、大勢を知って沈黙しているかどうか」と答えたことは⁴⁴⁾、看過すべきでない。しかし、逆に見れば、小林はゴリキーや魯迅に比肩できるのである。このような意味で、彼の『党生活者』は「ハウスキーパー」を真摯に深く考えるためには不可欠の文献であると言うことができる。

愛と革命は浪漫主義において共通性があり、共振・共鳴する。「ハウスキーパー」にはこの性格があり、『党生活者』はそれに迫るポテンシャルティがあるが、時代は余りにも抑圧的であった。ポテンシャルティが開花するために必須の自由は、封建的男尊女卑からも共産党の民主集中制からも二重に抑圧されていた。しかし、小林の力量=例えば「大熊信行先生の『社会思想家としてのラスキンとモリス』」や葉山嘉樹宛の書簡(新版全集第5巻、第7巻)に認められるように思想的に異なる立場でも内容に基づいて高く評価できる度量=なら、それを突破できたと思われるが、虐殺され未完に終わった。しかし、それを嘆くのが本論文の主旨ではない。小林が書き上げようとしたことを追究することが課題であり、これまでの考察はそれに取り組んだ試論である。

4. 自己分析

これまで生や性を論じてきたが、そのような己自身も見つめなければならぬと自覚する。これは「あなたがたは自分の量る秤で量り返される」(聖書「ルカ福音書」六章)や「教育者自身が教育されねばならない」(フォイエルバッハに関するテーゼ・三)の応用であり、論じる者が論じ返されねばならないと認識する。

そのために反省的に私の青年期について分析すると、私は亀有セツルメントの一年後輩の女子学生「チーズ(セツラー・ネーム)」や「だんだん村少年団」の女子中学生「おふじ(愛称)」との関係性におけるクライシスに直面したことを挙げねばならない⁴⁵⁾。その時、私は手も触れなかったが、しかし、チーズがもっと私に理解や共感を示したら、この段階を超えてしまった可能性はある。その直前まで進んだが、しかし、私は地域の教育文化運動に人生を賭／懸けようと志していて、安易にはできないと感じ、踏み切れなかった。

おふじとは志を同じくする可能性があり、さらに彼女の成長・発達が進んだら、踏み越えたかもしれない。しかし、彼女は中学二年生で、からだは小娘から娘への発達過程にあっても、少年団の子供たちとおしゃべりしている時などは、全く無邪気な子供(女兒)であった。彼女が私の下宿に来て、「引っ越しすることになり、もう塾にも少年団にも来られない。私は実は側湾症なの」などずっと話し続けて帰ろうとしなかった時は、成長して少しきつめになったTシャツのため、体型が割とはっきり見えるようになっていて、私は眩しいように感じて、まともに見られなかった。ふしだらな気持ちは確かに起きたが、「ダメダ、ダメダ」と押さえ付けるのに無我夢中で、手を出そうという気には全くなかった。この心理は、おふじと別れた後に、「惜しいことをした」という思いとして現れてきたのであり、その場では、感覚的に眩しすぎて意識化できなかった。ふしだらな感覚を抑えたのは無意識的であった。むしろ「こんなにきれいなのに側湾症だとは?」と、哀しくて憐れで、やりきれず、信じられない／信じたくないという不思議な気持ちになったと記憶している。その後、側湾症の知識を得るに従って、治療や対処によって十分に健康な生活が送れることが分かり、おふじもそうだ

ろうかと願った。

なお、チーズは『アイデンティティと時代』を読み、時間的な間違いを訂正したが⁴⁶⁾、記述の意味は認めてくれた。他方、おふじに関する記述は、謂わば私の「一人相撲」の類いで、彼女が読んだら「あら、そんなことあったかしら」と言うかもしれないと承知している。そのような場合は、モラトリアムにおける若気の至りで、純真な少女の言動を、つい卑しい思いで受けとめてしまったと反省する（彼女が読んだか否かは不明）。

私は、『党生活者』を、このような体験を自己分析しつつ読む。当然、私の体験など、烈士の小林や理想・思想に生・性を賭／懸けた「ハウスキーパー」たちに比べれば、全くささやかなものである。その認識に立った上で、「党生活者」小林と二人の女性の関係性には奥深く重いリアリティがあり、人間とは、その生・性とは、実存とは何か等々について心の底から考えさせると、愛惜しつつ評価する。このような意味で『党生活者』は「ハウスキーパー」を厳粛に考究するために重要な文献に位置づけられ、マルクスはじめ指導者たちの言行不一致を乗り越えるポテンシャルティを擁している。

注

- 1) 韓国「聯合ニュース」、日本「産経新聞」2015年4月3日（ソウル、名村隆寛）。
- 2) 本庄栄治郎校訂、奈良本辰也補訂『世事見聞録』岩波文庫、1994年、pp.7-8。
- 3) 同前、p.317。
- 4) 同前、p.328。
- 5) 同前、p.321。
- 6) 同前、p.319。
- 7) 同前、p.323。以下同様。
- 8) 田村泰次郎の「肉体の門」（版は多数）の最後の場面から、戦後のパンパンたちのリンチも類似していることが分かる。それは文学作品だが、リアリティがあると評価する。田村に関しては別の機会に論じる。
- 9) 前掲『世事見聞録』pp.331-332。
- 10) 同前、p.331。
- 11) 同前、pp.337-338。
- 12) 藤野渉、赤澤正敏訳『法の哲学』（世界の名著第三五巻）中央公論社、1967年、p.169。
- 13) 『辞源』修訂本・合訂本、商務院書館、北京、1997年、p.411。
- 14) 陳盛韶／小島晋治、上田信、栗原純訳『問俗録—福建・台湾の民俗と社会—』東洋文庫495、平凡社、1988年、pp.162-163。
- 15) 同前、pp.61ff。
- 16) ウィリアム・ヒントン／加藤祐三他訳『翻身—ある中国農村の革命の記録』全2巻、平凡社、1972年、第I巻、pp.193-194。以下、同様。
- 17) 廖亦武／劉燕子訳『中国低層訪談録—インタビュー—どん底の世界—』集広舎、2008年。
- 18) 『哲学入門』154。武市健人訳（岩波文庫版、1952年）ではp.326。
- 19) 北京時事、2015年2月27日。
- 20) 前掲『中国低層訪談録』127頁。
- 21) ヘロドトス『歴史』第一巻一九九篇（松平千秋訳、岩波文庫、上巻、1971年、pp.148-149、及び注）。以下同様。
- 22) ギリシャ語のラテン文字表記のhieros gamos（ヒエロス・ガモス）、英語ではhierogamy（ヒエロガミー）。
- 23) 中務哲郎訳、岩波文庫版、1999年、p.97。
- 24) 増田渉訳「暴君の臣民・随感録（65）」『魯迅選集』第六巻、岩波書店、1964年、p.57。
- 25) 国連、及びBloomberg、2015年8月4日、Sex Slaves Sold by Islamic State, the Younger the Betterの日本語抄訳記事等、以下同様。
- 26) 各N G Oのサイト等、2015年8月最終閲覧。
- 27) 人民日報、2015年2月10日、Record China、2015年2月12日（翻訳・編集／本郷）等。

- 28) B B C, 2015年4月2日, 参考消息網, 同日, 及びRecord China (翻訳・編集／大宮), 4月3日等.
- 29) Record China, 2015年8月20日等. 以下同様.
- 30) 韓国・モーニングトゥデイ, 8月23日, Record China, 8月24日等. 以下同様.
- 31) 香港の『開放』2011年10月号.
- 32) 宮原誠一の概念で, 山田『平和教育の思想と実践』(同時代社, 2007年)等参照.
- 33) 井上とし『深き夢みしー女たちの抵抗史ー』ドメス出版, 2006年, p.230, 及びp.30.
- 34) 同前, pp.229-232.
- 35) 同前, p.34, p.149, p.226等.
- 36) 関連する文献は多く, その中で永畑道子『恋の華・白蓮事件』新評論, 1982年(その後, 文春文庫, 1990年, 藤原書店, 2008年)参照.
- 37) 1947年1月2日の日付が記された「新しい政治と文学」. 引用は『宮本顕治文芸評論集』第二巻, 新日本出版社, 1966年, p.29.
- 38) 山田正行「記憶の風化と歴史認識に関する心理歴史的研究—抵抗と転向の転倒—」の3(3)「『非転向』の神話化の問題—宮本顕治に関連させて—」(『社会教育学研究』第12号, 2007年4月)参照. この点について, 私はその後も研究を深め, この小論は宮本を対象にしているが, 野坂と組み合わせると, その問題は極めて重大であると考えている. 野坂はスターリンや毛沢東と渡り合った最優秀のスパイであり, 宮本はその手下という関係性となる. なおスターリンや毛沢東は野坂の正体を知りながら, 日本との駆け引きに用いていたと捉えている. そうでなければ, 野坂はソ連の苛烈な粛清を逃れられず(生存した日本人男性共産主義者は彼のみ), また延安では中共と日本軍は密かに連絡を取り続けていた(ピョートル・ウラジミロフ／高橋正訳『延安日記』上下, サイマル出版会, 1973年, 参照). 野坂はソ連や中国に「亡命」しても, 宮本は獄中でも闘い続けたというのが, 野坂にはレーニンが亡命中に書いた「哲学ノート」, 宮本にはグラムシの「獄中ノート」に類するものがないことも傍証になる.
- 39) 前掲『深き夢みしー女たちの抵抗史ー』pp.229-232.
- 40) 『パンセ』ブランシュヴィック版断章一(版も訳も多数).
- 41) 「社会生活の純潔性」『婦人朝日』1947年5月号(青空文庫所収).
- 42) 初出は筑摩書房, 1958年. ここでは2008年の新日本出版社版による.
- 43) 新日本出版社版『小林多喜二』p.232.
- 44) 藤井省三『魯迅—東アジアを生きる文学—』岩波新書, 2011年, pp.210-211.
- 45) 山田正行『アイデンティティと時代』同時代社, 2010年, pp.124ff, pp.146ff.
- 46) 私が深夜にチーズのもとを何度も訪れた「夢遊」は1967年ではなく, 1975年(同前, 124頁以降), また「チーズとの再会と別れ」は1978年ではなく, 1979年(同前, 167頁以降)等.

Study of Thought and Praxis of Self-Education against the Violent Complex (VI)
— Psycho-historical Study of the Complex of Eros and Thanatos (3) —

YAMADA Masayuki

*Department of Human Sciences, Osaka Kyoiku University
Kashiwara, Osaka, 582-8582, Japan*

I describe tangibly in detail tenacity of sexual habitus underlying and connected at a fundamental and unseen dimension both in the Orient and in the Occident, as follows, the phonological relevance between “baita” of Japanese and “biaozi” of Chinese, “tongyangxi” and “xinfuzi” who is forced to be a wife by slave trade in China, sacred prostitute in the ancient Middle and Near East (middle and near is from the viewpoint of the Occident), “common in wives/community of women” in The Communist Manifesto in the modern Occident, “girl soldiers of Xinjiang frontier defense pioneer unit” of the Chinese Communist Party and the People’s Liberation Army, “housekeeper” of the Japanese Communist Party. On these historical facts I elucidate that Kobayashi Takiji express the life and sexuality getting rid of “community of women” of Marxist Communism in *Life of a Party Member*.

Key Words: “ianfu”, Das Dichten of G. Hegel, reality of literature, self-analysis